

和泉式部の「露」の歌 — 無常を詠む

金子紀子

一 はじめに

和泉式部の歌には「無常」を詠む歌が多いという指摘が既にある。また、和泉式部は「露」の歌を多く詠んでいる。この、一瞬で消えるはかないものとして古来から詠まれてきた歌材「露」をどう詠み込んでいるか、その歌い方を考察することにより、和泉式部の歌の「無常」表現の一つの面をとらえられるのではないかと考える。

「露」は自然の景物のひとつとして、万葉集の時代から歌に詠まれている。古今集の仮名序には「かくてぞ、花を賞で、鳥を羨み、霞を哀れび、露を悲しぶ心、言葉多く、さまざまに成りにける」とあり、三十一文字の歌の形が定まったあとの歌のさまざまな形の類例として、事物「露」があげられ、「悲しぶ」という心の要素と結びつけられて、花鳥同様に和歌の型の例とされている。「露」は和歌を詠むにあたり、感興を得る歌材として身近なものであったことを示しているよう。

『歌ことば歌枕大辞典』で渡部泰明氏は、歌ことばの「露」は、主に秋に用いられ、草木の上に置く用例が多く、光ることから玉に見立てられ、また、草葉を紅葉させるもので、比喩としては涙に喩えられることが多く「露と涙が交錯し、重なり合って、情景一致の情景を生み出すところに真骨頂があるう。」とまとめている。また露は消えやすいものであるからはかないものに喩えられ、「蟬丸が詠んだという、『秋風になびく浅茅の末ごとに置く白露のあはれ

世の中』(新古今集・雑下・一八五〇)は、葉末の白露にこの世の無常が突き詰められている。『露の命』『露の身』という連語の場合の露も同様のニュアンスを背負う」とする。(注1)

勅撰集において「露」の語を詠んだ歌は主に秋部に多い。古今集では「露」の歌四十四首のうち十九首、後撰集八十九首のうち実に四十八首が秋部にある。拾遺集では五十首のうち八首、後拾遺集は四十一首のうち二十一首が秋部(拾遺集は雑秋を含む)である。一方で「露」歌は恋歌、離別、哀傷、雑にもあるが、これらの部立でも秋の景物と共に詠まれる形が多いので、やはり「露」は秋の景物と捉えられていたといえよう。ただし夏の「露」の歌も数は少ないが、各集に見いだされる。

これら三集及び後拾遺集の秋部を詳細に見ていくと、露という景物は基本的には秋の美を詠うもので、植物とともに詠む、涙のたとえ、白露・玉とみる、袖・袂などと詠むといった類型は古今集以来同じである。組み合わせられる素材では、萩は三集とも見られ、後の後拾遺集が最も多い。草、草葉(草葉に置く露)、女郎花、行事との組み合わせで菊も詠まれる。また、露は木々の木の葉を染めるという発想から、特に古今集では「木の葉」「木々」「木の下」との組み合わせが見られ、また、「あきの野」「秋の夜」と露の組み合わせは四集ともに詠まれている。後拾遺集では、浅茅・荻など新しい組み合わせもあるが、露そのものを主題とする歌は少なく、自身の感興を詠む歌が多く見られる。

このように「露」は多くは秋に関わって歌われ、また露そのものを歌うときは、透明で光る美しいものとして「玉」に喩えられる。そして特に注目すべきは、「露」はさまざまな事物(萩、朝顔、草葉)と取り合わされることで、見た人間の心情や感性のいろいろな部分に作用し、感興(玉、はかなさ、涙など)を催させるさまを詠む歌が多いことである。また「露」のままで長続きしがたいことから無常やはかなさを思う歌に転ずる。

勅撰集の秋の部では、「露」は消えやすくはかないものという前提の上で詠まれているものの、無常までを見つめる歌はあまりない。むしろ、恋、離別、哀傷、雑歌などの部立で無常、露の命、はかなさを詠う歌が見られる。以下、いくつか用例をあげる。

『古今和歌集』卷第十二 恋歌二

ともり

615 命やは何ぞは露のあだものを逢ふにし換へばおましからなくに

『後撰和歌集』卷第四 夏

よみ人しらず

193 常もなき夏の草葉に置く露を命とたのむ蟬のはかなさ

『拾遺和歌集』卷第二十 哀傷

病して人多く亡くなりし年、亡き人を野ら敷

などに置きて侍を見て

すけきよ

1325 皆人の命を露にたどふるは草むらごに置けばなりけり

『後拾遺和歌集』卷第十四 恋四

女につかはしける

入道撰政

813 思ひには露のいのちぞ消えぬべき言の葉にだにかけよかし君

秋部によく見られる、「露」の美しさや「露」のある情景を愛でる歌とは異なって、「恋部」ではわが身を「露の命」のはかなさにたとえて心情を訴える歌がよく見られるが、これはむろん和歌上の言葉であるに過ぎない。これに対

して「哀傷」では、現実的な「死」を詠む。とりわけ拾遺集の1325番歌は、疫病により死者があちこちに放置されているという、凄絶といえる状況を目の当たりにしての人の命のはかなさへの思いを「露」と詠んでいる。

こうした和歌史の下、和泉式部が「露」をどう捉えて詠んでいるかを、以下考察する。

.....

*和泉式部の歌の本文と主に引用した和歌の本文については以下の通りである。次のように略称で表記する。

*『和泉式部集・和泉式部続集 清水文雄校注 岩波文庫 一九八三』↓和泉式部集(続集も含める) 注の引用

↓『文庫』

*八代集 『新日本古典文学大系』(岩波書店)

なお、各勅撰集は古今集、後撰集のごとく略称を用い、『』はつけない。

*取り上げた和泉式部集の歌は他の勅撰集に入集しているものも多数あるが、他出歌が特に重要出ない場合、紙数の関係で注記はしていない。

*引用した歌、及び家集で(注)の表示がないものは『新編国歌大観』(日本古典ライブラリー)を典拠とする。

二 初期百首の「露」の歌

まず最初に取り上げるのは初期百首のうちの「露」を詠んだ歌である。初期百首は先行研究も多くあり、解釈についても久保木寿子氏『和泉式部百首全釈』(以下『百首全釈』)ではそれまでの諸注釈をふまえながらの詳しい解説がなされている。久保木氏は和泉式部百首について、「先行百首の歌材を基に、いかにより新たな歌境を提示するか、錯誤を辞さない模索的な試みとその身上であり、常識的な美の枠組みから逸脱する要素を多分に内包する。」との見

解を示している。和泉式部の初期百首における「露」を詠んだ歌は、夏に二首、秋に二首、冬に一首ある。恋二十首のうちには存在しない。

夏

24 夏の日の脚にあたればさしながらはかなく消ゆる道芝の露

29 とこなつにおきふす露はなになれやあつて背子が間遠なるらん

秋

44 秋の田の庵に葺ける苦をあらみ漏りくる露の寝やはねらるる

49 白露のかけて置きたる藤袴ほころびにけり霧や立つらん

冬

61 白ながら露のおきたる白菊を今朝初霜に見ぞ紛へつる

「露」がほかの物に影響を及ぼしている様子を詠んだ歌は49、61番歌で、間遠な背子や眠れぬ夜などに対する詠者の心情、つまり人事に収束するのが29、44番歌である。24番は景を詠みつつも「はかなく」見ている詠者の心情を強く感じさせる。いずれも勅撰集で見たような美しい「露」そのものを主題とする歌ではない。24番は露の美を主題とする歌ともいえるが、道芝の露の「はかなさ」を焦点化するため心情を詠む歌めいた響きが生じている。

和泉式部に先行する百首歌の中で「露」が詠まれた例としては、好忠百首の杵冠歌に一首、惠慶百首の秋に一首、「きのえ」一首、応和した源順に一首である。ほかに、『海人手古良集』夏に一首、秋に三首、ほか一首、重之百首では夏に一首、秋に二首、重之女百首は夏に一首秋に一首見られる。和泉式部の初期百首の五首は比較的多い。とくに好忠の百首歌の四季の中に「露」を詠んだ歌がないのは興味深い。百首歌の序には「わが身ひとつに憂けれども、ひ

をむしの日暮らし、草葉の玉の風を待つほどなれば」と、はかないものの喩えを連ねる中で「玉」、つまり「露」をとりあげているからである。ただ、のちの『毎月集』の中では六月から十二月までの間、十五首の「露」の歌が詠まれている。(注3)序の美文調にも登場する「露」は、歌材としては既に手垢のついたもので、新しい試みである「百首歌」の中では、特に食指の動く素材ではなかったのではないかと。

この中で特に和泉式部の「夏の露」の歌を考察する。

24夏の日の脚にあたればさしながらはかなく消ゆる道芝の露

24番は、「夏の日の脚」から始まる。「日の脚」は「ひあし」ともいい、漢語「日脚」(ニツキヤク)との関連が考えられる。「日脚」は「日の進む早さ。ひかげ。ひあし」(『大漢和辞典』)。「ひのあし」は「雲の切れ目や物の間から差し込んでくる日光」の意で、ジャパンナレッジによれば『蜻蛉日記』上巻と『源氏物語』末摘花巻に用例が見られる。ただし歌語としては珍しく、新編国歌大観所収歌のうちでは「ひのあし」を詠むのはこれのみである。

和泉式部がこの語をもちいたことについて『百首全釈』はこの歌の補説で「『日の脚』は古今集の夏の歌材の枠をはみ出すもの。漢語の和訓を歌語化する例は、『日脚』以外にも、30『涼風』・33『螢火』・34『人身』・65『蓬門』など。新規歌材の開拓への意欲のあらわれであろう」としている。

また道芝は、歌語としてのイメージは時代によって変遷がみられるが、おおむね路傍に生える小さな草というものであり、万葉集には「道の芝草」で詠まれている歌があるが、中古では卑近さゆえに歌材としては取り上げられなくなり、三代集には見られず、平安中期から中世になると、後朝の歌語として「道芝の露」が定着していき、「またふと目にとまる道端の『芝』の上の露は、とりわけはかなさを強く感じさせる存在」としてはかない命のたとえとして詠まれるという(『和歌植物表現辞典』(注4)「しば」の項)。「和泉式部集全釈」(注5)(以下『全釈』)では、用例は新しく、和泉

式部の時代頃からよくつかわれるようになったらしいと指摘している。「道芝」の語は好忠の『毎月集』の「三月を
はり」の最初の歌に詠まれている。「道芝の露」は勅撰集で見られるのは新古今集が最初で、同時代では『高遠集』、
『重之子僧集』に見られる。

24番の歌は、まず「脚」という語が光線をより強く印象づける。露を見ることができるのは早朝である。夏の朝の
光線があたった道端の芝草の露はすぐに消えてしまう。強い日射しにはかなく消える芝草の露を、単刀直入に詠んだ
歌である。夏の草葉の露としては、後撰集「193常もなき夏の草葉に置く露を命とたのむ蟬のはかなさ」や『新撰万葉
集』「321なつくさもよのまはつゆにいこふらむつねにこがるるわれそかなしき」などがある。これをふまえると、「さ
しながら」、夏の日差しに照らされそのままとは、一夏で死ぬ短命な蟬が命とすが「露」、夏草が夜の間に憩う
「露」さえも残らない過酷な夏の景、ほんの少しすがるべき抛り所の「露」さえも消えるはかなさを示唆しているの
ではないか。

先行する百首歌に見られる露の歌は、源重之「260行きなれぬ道のしげさに夏ぐさのあか月おきは露けかりけり」、
重之女「24いそげどもゆきもやられぬ夏ぐさのしげれるやどはみちを露けみ」と、いずれも茂る夏草の道を「露け
し」と詠む後朝の歌で、露は涙をよそえるものである。一方和泉式部の24番歌は、直接は後朝の歌ではないが、恋人
が明け方近く道芝の露を踏んで帰った後、日差しにすべてはかなく露が消えたと詠む。この場合「露」は涙ではな
く、むしろ自身の命のはかなさの喩えになっていると考えられる。

29「とこなつにおきふす露はなになれやあつれて背子が間遠なるらん

この歌は述懐ととれる歌である。

「とこなつ」と「露」の組み合わせで詠まれているのは、勅撰集では、後撰集以降に見られる。私家集では『伊勢

集』、『仲文集』、『源順集』、『実方集』等に歌があり、いずれも「床」におく「露」＝涙と掛けてある。叙景の歌も見られる。

和泉式部の29番は、「常夏」に「床」、「置き」と「起き」をかけ、「露」を「涙」に喩えるのは、他の歌集の例と同様である。「とこなつにおきふす露」は、「常夏の花に置く露」と「床に起き伏す私の涙」を意味し、例に見た歌のように類型的な表現で、いわば当たり前の現象として捉えられている。和泉式部はそれに「なになれや」と続けている。『全釈』は「和歌の世界における慣用句。『何だい、いったい』、『まるで何にもならないぢゃないか』と解釈しており、『百首全釈』では『これは一体何なのだろうか』。ここは、素朴な疑問の体。上述のことへの反駁ではない」としている。

下句の「あつれて」は、「熱る」「暑る」で、暑さに苦しむことであるが、諸注が指摘しているように、用例が少なく、この歌のほかは『好忠集』、『散木奇歌集』、『爲忠初度百首』に見られるのみである。和泉式部はこの好忠の『毎月集』の歌、「¹¹⁵夏衣うすくや人の思ふらんわれはあつれてすぐす月日を」を踏まえているのであろう。この好忠の歌は男の立場から詠んだものであるが、一方和泉式部の歌は、「これは女の立場からすねたもの」(『全釈』)と解釈する。

「常夏におく露」を見て「これは何なのだろうか」と自問して、「常夏の露」から「床の涙」を想い、暑さゆえにいつの間にか恋人が間遠になったからなのだろうと結ぶ。常夏の露に独り寝に傷ついていた自分の心の形を見出している。単純に思いを述べたように見える歌であるが、「何なれや」「あつれて」と口語的な表現を取り入れることで、上句と下句の間に和泉式部が一瞬思いめぐらせた時間、自分の心に気づいてしまった自嘲を感じさせている。

次に秋、冬の歌を見る。

44 秋の田の庵に暮れる苦をあらみ漏りくる露の寝やはねらるる

この歌は後撰集の天智天皇歌「302 秋の田のかりほのいほの苦を荒みわが衣手は露に濡れつゝ」の、大胆に三句までをほぼそのまま取り入れている。和泉式部はこのような手法をたびたび用いている。一例を挙げれば、初期百首の春歌「55 花にのみ心をかけておのづから人はあだなる名ぞたちぬべき」は、古今集春上のよみ人しらず「62 あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり」の上句を取り入れている。このとき和泉式部は、元の歌を受け継ぎつつ微妙にずらしてその先を詠む。たとえば古今集の歌は直接的に「桜」が「あだなり」であるが、百首歌では「あだなる桜」に心をかける「人」まで「あだなり」と詠む。この44番の歌意は「小屋の屋根の薦の目が粗いので、露が漏り落ちて、少しも眠れない」ぐらいであるが、大胆に上の句を取り込んだ天智天皇詠の下の句「衣の袖が濡れてしまふことだ」という意は承知の上で、その先の気持ち「露で衣も濡れてしまふので眠れない」を詠んでいる。天智天皇歌の「衣が露に濡れた」詠嘆を背後おきつつ、露ゆえに眠れぬ状態、ひいてはその時の心を感じさせる歌へと変えられている。

49 白露のかけて置きたる藤袴ほころびにけり霧や立つらん

「露」と「藤袴」の組み合わせは、勅撰集では新古今集以降にみられる。私家集では元真、元輔などの用例が早い。元輔の歌は天徳二年の白河院で「秋の花の露を逐ひて開くといふことをよみ侍しに」として詠まれた、「27 ほころびて花咲きにけりふちばかまにほひにむすぶ露にまかせて」である。49 歌では縁語が多々使用されているが、単純に解釈すると、「白露が置いた藤袴が咲き綻んだ。霧が立っているのだろうか」ということで、掛詞を生かせば「藤色の袴が綻びた。切り断ってしまったのだろうか」となる。『百首全釈』では「白露の」は「懸けておく」を導き出した

めの枕詞的なものとし、「藤袴の花が綻ぶ」ことと「霧が立つ」の関連にのみ注目して解釈しているが、「白露」は単なる「懸けておく」を導くだけの景物なのだろうか。むしろ元輔の詠歌に着目すると、「露」と「藤袴が綻ぶ」の関連こそが重要だろう。「白露」が置くことから「霧がたつ」を推測する必然性は可能である。実景としても霧の立ちこめるような日は露しげく、草葉が濡れる。たとえば和歌にも、『古今和六帖』第一「129 初秋の空にきりたつから衣袖の露けき朝ぼらけかな」、『能宣集』八月ばかりるなかなる人にきぬつかはす「47 あきぎりのたつたびごろもおきてみよつゆばかりなるかたみなりとも」、『斎宮女御集』くだりたまへるころ、かの宮より「202 あきぎりのたちてゆくらんつゆけさにこころをつけて思ひやるかな」などの例があり、「露にぬれた袴」も連想させられるのである。

61 白ながら露のおきたる白菊を今朝初霜に見ぞ紛へつる

古今集には「露」は「木々の葉を染める」という見立てがあつた。前項で述べたように後拾遺集には見られないが、元輔（あるいは貫之）の屏風歌「353 うすくこく色ぞ見えける菊の花露や心をわきて置くらん」の菊の例がある。また、先行の百首歌では重之女百首では「51 うつろへば一つ色にもあらなくにたれかいひけんしらぎくの花」がある。和泉式部の歌は、この逆で「白ながら」、白いままでも、菊の花を移ろいさせることなく露が置いている白菊を初霜に見間違ふと詠んでいる。「白ながら」はこの歌の外に例を見ない。

「見まがう」は当然、古今集巻第五凡河内躬恒「277 心あてにおらばやおらむ初霜のおきまどはせる白菊の花」を念頭においている。和泉式部の歌の場合は、初霜が置く以前の露の置いた白菊を詠んでいるのである。

以上が初期百首の「露」の歌である。用語の特異性は見てきたとおり、露との組み合わせられた歌材は新しいものではないが、組み合わせ方が工夫され、それぞれ「露」の置かれた状況（傍線の部分）を生かした表現は、「露」にいわば新しい居場所を与えているようで、和泉式部の新たな表現を生み出そうとする、姿勢が見られるのである。

三 「露」の歌について

和泉式部の歌で詞書、及び歌に「露」の語が詠みこまれている歌は、先にあげた百首歌の五首以外にも、和泉式部集に六十一首（重出歌は含まず）、家集に無い歌が後拾遺集に一首、新古今集に一首、夫木和歌抄に一首、新拾遺集に一首で、七十首ほどある。これらの和泉式部の歌の特徴をつかむために、i 伝統的な歌い方 ii 思いを詠む（独詠） iii 人とのつながりで詠む（贈答歌）の三つの観点から、以下考えていきたい。

i 伝統的な詠み方の歌

「露」歌のもっとも伝統的な詠い方は、「玉」「白玉」に見立てるものであるが、この発想による歌は、和泉式部の「露」歌にもいくつか確認できる。二首ほどあげてみよう。まず、「135葉にやどり枝にはかかる白露を白く咲きたる花と見るかな」では、すぐに落ちる白露を「白い花」に見立てることで、ごくはかない露の花をイメージさせている。また、「145白玉の敷ける庭とて下りつれば露に衣の裾はぬらしる」は「露」を「玉」と錯覚したまま庭に降りて衣の裾をぬらすという、視覚から行動、知覚という形の見られるなどのように、単なる「露＝玉」の見立てに終わらない表現が見られる。

ii 思いを詠む（独詠）

次に「露」のある情景から誘われる思いを詠んだ歌を考察する。
はじめに詞書の工夫により、景物と心象を詠み込んだ、次の連作的歌群を見る。

松の木に蜘蛛の網かきたるに、露の置きたるを見て

1064 ささがにのいとほかなき露といへど松にかかれは久しかりけり

と見ゆるほどに、消ゆれば

1065 はかなしや朝日まつ間の露を見て蜘蛛手に貫ける玉と見けるよ

「蜘蛛」の巣に露が宿る歌は古今集の秋に二首、後撰集、拾遺集にはなく後拾遺集に一首ある。古今集では、巻第四秋歌上の文屋朝康の「是貞親王家歌合に、よめる」²²⁵秋の野にをくしらつゆは珠なれやつらぬきかくる蜘蛛のいとすぢ、後拾遺集は巻四秋上の藤原長能「³⁰⁶さ、がにの巣がく浅茅の末ごとに乱れてぬける白露の玉」があり、この歌は『長能集』では花山院の歌合が中止になって歌だけ奉ったという詞書とともに出ています。

古今集、後拾遺集に収載されたこれら二首は、蜘蛛の巣に露がかかった様子を蜘蛛の糸に玉が貫くと表現している。『枕草子』一二五段にも雨が蜘蛛の巣にかかりこぼれ残った露を「…白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ」と書いていように糸と玉という見立て関係で歌われることが多かったことがわかる。

和泉式部の1064番は「松」の木にかかった蜘蛛の巣におく露を見て、蜘蛛の巣に置くとてもはかなし露といえども、長寿の松に懸かっているので久しく留まっているのではないかと詠う。蜘蛛の露であるが「玉」の見立ては使わず、蜘蛛の巣自体はかなしいものであるが、そこに置くさらにはかなし露と常緑の松とを組み合わせ、その対照の妙が面白い。1064番歌は、これ一首で独立した歌である。しかし「と見ゆるほどに、消ゆれば」と次の1065番とをつなぐ詞書をつけたことで、二首が連動し、ひとつの歌境が生まれている。

1064番を詠んだその目の前で、露は消えてしまった。1065番歌は、朝日をまつ間の蜘蛛の巣におく露は、糸に貫く玉かと思つて見ていたがむなしかつた、朝日があがつたらやはり露は消えてしまったのだ、ぐらいの意である。長寿の松にあやかることができるかと思つたがはかなし消えてしまったので、「はかなしや」は玉と見ていた自分がおろかだったという気持ちと、あつけなく消えてしまった露に対しての感慨とが込められている。一度は松にあやかり得ると歌っていただけにいっそう露の運命的なはかなさが際立てられている。

「まつ」に「待つ」を掛けたとみることもできるが（『全釈』）、やはりこの二首の妙は、詞書によって一瞬の景から、一瞬の景でしかなかったことに気づいての感慨へと移行する、微妙なうつろいを描いた点にある。『和泉式部日記』に結実してゆくような、詞書とともにあるからこそその表現を志向する歌である。

次の二首では「露」は詠まれているが、実景というより、露の情景を推測し、それから呼び起こされる感興を詠んだ歌である。

寝もねられぬままに探れば、衣の濡れたるもあはれなり

682 浅茅生にやどる露のみおきつつ虫のねられぬ草枕かな

この歌は673番の「長柄の橋を見て」という詞書の歌に続く、淀川の船旅のなかの連作のである。ひとつ前の681番は「仮屋して、浜面に臥して聞けば、都鳥鳴く」という歌で、ここで陸地が上がって泊まった様子がわかる。682番の詠歌状況は多分同じで旅寝の歌である。浅茅生と露の組み合わせは多く詠まれているが、勅撰集では後拾遺集から見られるものである。また浅茅と虫も詠まれていて、やはり勅撰集では後拾遺集からである。詞書は旅先の仮屋で寝付くことができないうまま衣を探ってみれば（浅茅におく露で）湿っぽいのも哀れである。衣の濡れていることから浅茅の露を連想、虫の音が聞こえ、その中で自分のみ起きたままでいる、旅寝の感慨を詠んだ歌である。「虫の音」の「ね」から「寝られぬ」にかけて自分が寝られないと詠んでいるわけだが、実は鳴き続けている虫も寝てはいない。浅茅が生える宿に露のみが「おきぬつつ」と詠まれることで、この夜を分かち合うべき他者の不在を痛感させつつ、同時に自分と露と虫しか存在しないことを示唆することで、単に寂しいとか侘びしいだけに終わらない感慨を引き出すことに成功している。

暮れぬれど、奥へも入らず月見るほどに、夜は明けぬるなるべし、

空のけしきあはれなるにも

1488 まどろまで明かしつるにも今しこそ野辺に宿れる露もおくらめ

『和泉式部日記』^(注10)を思わせる詞書である。日が暮れたが、奥にも入らないで端近く臥して月をながめ明かすという場面は日記に何回も見られる。「曉起きの文」の場面には、「…大空に西へかたぶきたる月の影遠く、すみわたりて見ゆるに、きりたる空の歌氣色、鐘の声、鳥の音一つに響きあひて」と、夜が明けたあとの空のあわれな風情が描かれている。一晚中外の景色を見ていたのだから、「夜は明けぬなるべし」は見えぬものへの推量ではない。段々に夜が明け、見ている本人にもいつが夜明けか判別がつかない、明けきる直前の微妙な時間帯が示されている。

一晚中寝ないで明かしてしまつたが、ちようど今、朝野辺に宿つた露も置く(起く)だろうという意で、明け方のあわれな風情に掻き立てられた、朝露が置く時間帯である今への感興を詠んだ歌である。夜が明けて庭先の露を「見た」と表現するのではなく、野辺の露を想像して「起くらめ」と詠むのは、自分は眠らずにいたが、眠っていた人も今は起きたであろうという意味にもとれる。『全釈』は他の人のところに泊まつた恋人も今頃起きていてしようの意に解釈しているが、詞書の情趣とはそぐわない恨み言になってしまう。これは一晚中月を見ながら独り時を過ごした後の心象で、孤独を見つめる歌ととりたたい。

この「露」から呼び起こされる気持ちに詠む歌の「露」は比喩であつたり意識上のものである。浅茅、女郎花、蜘蛛、野辺、といった「露」が置く定番の情景があり、その情景を意識しながら詠む歌だが、「露」を見ているわけではなく、観念上の「露」に心象を託して思いを述べているのである。ここに取り上げた歌の682番、1488番は独り夜を過ごす状況に、消えやすい、はかない「露」の語を詠み込んでいることで、実はここにいない「人」の存在が暗示され、いっそう孤独感を際立たせている。

iii 人とのつながりで詠む

和泉式部の歌の中で「露」の語が一番多く詠まれているのは、人とのつながりの中で露を詠む歌である。その中には独詠もあり、また親しい知人との贈答もある。主として恋人への贈答が多く、「露」にたどえて男女の仲のはかなさを嘆く歌や、人の心の無常を悲しむ歌もあるが、次にあげる二首のように、はほぼ恋人とのやりとりで、軽妙に応酬している歌もある。この場合は「露」は実際の露ではなく、観念上のものである。また詞書に語る詠歌の状況は複雑であり、いろいろな憶測を加えないと解釈が決まらない。

この頃、物いふ声を立ち聞きて、人の「聞えん」などいひたるに

834 萩の上に露吹きそへし雁が音を上の空にも聞きてけるかな

詞書の「この頃」はこの歌の前が「七夕七日」歌なので、「秋」のことであろう。

「物いふ」は言葉を交わす、男女の情を通わすの意味があるが、和泉式部の歌に219番「忍びて物言ふ人のあるに、異人のあれば、急ぎて出づるに」、435番「例の人来て、物いふ所に立ち寄りたれど音もせねば、帰りて恨みたるに」という詞書がある。この場合は和泉式部に関わりのある男との会話であろう。「立ち聞きて」とあるので、聞いたのはむろん男性である。「人」はその男性で、「物いふ声」すなわち他の男性と和泉式部の会話を聞いて、お話ししたいと言ってきたのでと解釈する。

『全釈』では上三句を「萩の上に露を吹き加へる遊びのやうに、ほんのかり（雁）そめの気持ちでちよつと口だしてゐたわたしの声に」と解釈しており、この歌の背景に古今集巻四、秋歌上のよみ人しらずの歌、「221なきわたる雁の涙やおちつらむ物思宿のはぎのうへのつゆ」と、『古今和歌六帖第一』つゆの項「545白露をとればけぬべしいぎとらじ露吹きそひてはぎのあそびせん やかもち」の歌をあげている。また『文庫』では「萩の上に涙の露を催し添

えた悲しい雁の声―私の声を」と、両解釈に違いが見られる。

「吹きそふ」は吹き加わるの意で、「あらし吹きそふ」「風をふきそふ」などと詠われるが、新編国歌大観によれば、平安時代はきわめて少ない。和泉式部以前の用例は『中務集』と『古今六帖545番』、『源氏物語』に二首見られるのみである。この歌の場合、風の語も何もないが、古今集の意を汲み、萩の上の露に空を飛んでいる「雁」の涙が加わった（吹きとんできた）ととりたいたい。

また「うはのそら」と「雁」を詠んだ歌は平安時代では勅撰集は金葉集が初見で、和泉式部以前の歌人の例は、『夫木和歌抄』巻第十三に『是貞親王歌合』で詠まれた友則の歌、「恒久親王家歌 5488 かりの鳴くうはのそらなる涙こ

そ秋のたもとの露とおくらめ」がある。この友則の歌の「うはのそら」は「漠然として雲をつかむようなさま」（『日本国語大辞典』）である。和泉式部の歌では雁とともに詠み込まれた歌はこの834番のみであるが、他に三首ある。そのうちの780番は主体は違うが、同様の詠まれ方をしており、「あなたのいうことは根拠がない」というような意味で詠まれている。

歌意をまとめると、萩の上におく露は雁の涙、その雁の鳴く音すなわち私の泣く声を、いい加減に聞いていたのですねいうことになる。「もの言ふ声」は「泣く声」ととらえ、それを立ち聞きした他の男が、慰めるつもりか適当に言い寄ってきたのを拒んだという状況が考えられるのではないか。むろんこの「露」は自らこぼれ落ちた涙の表現と考える。

人の家に、秋の頃、「萩上ノ露」と云ふ事を云ひたるに、「ことわりなる事どもを云ひつづくれば、え問
ふまじ」と云ひたるに

1370 萩原に臥す小男鹿も云はれたりただ吹く風にまかせてを見よ

詞書の『萩上露』と云ふ事』とは、何を意味するだろうか。『文庫』では前掲の古今集の「22なきわたる雁の涙やおちつらむ物思宿のはぎのうへのつゆ」を引くかとの補注がある。『日本古典全書』^(注1)では『萩の上の露』は以前の歌の題で、その題で詠んだ歌について論じた問答の連作が拾遺集雑下に出てゐる。」(513、514番)、「今もそれが論になってゐて盡きないのである。」とあり、「露がどこに結ぶのかは、ただ吹く風次第のことだ」と「歌によつて論を一掃しようとしたもの」と解釈している。

また、『全釈』は「人の家」は他の女の家でそこにすみついた男への歌として「萩の上の露」は「男が手折りやすい女の評価に用ゐる語」で、この歌を「その言葉、わざと男に対して用ゐ、他の女にももの見事に誘惑されて、入り婿になってしまった男を、皮肉つたものと見た。」という前提で解釈され、かなり複雑な詠歌状況を想定されている。「人の家に」という言葉は、他に和泉式部の歌にはなく、主に「人に」、「人の許に」が多い。ただ、『全釈』のような解釈をするには、もう少し説明があつても良さそうなおものである。

古今集221番の歌は前述の834番の歌にも引かれており、のちの定家の歌論書にも取り上げられているような著名な歌であるから、「萩の上の露」といえばこの歌をさすものといふことは考えられる。「と云ふ事を云ひたるに」とは、この種の言葉のみ贈つたものか。

「ことわりなる事ども」は理屈つばいことと各注釈はしているが「道理、当然のこと、当たり前のこと」を、「云ひつづぐれば」というのは、そういうことを何回もいうなら行かない、『文庫』は「問ふまじ」と校訂しているが、『全釈』は「訪ふまじ」になっている。ここは「訪ふまじ」の方が意としてはわかりやすい。

いろいろな解釈があるが、ここは「萩の上の露」とだけ言って古今集の歌を暗示し、「涙と共に物思いにふける私」を思い出させようとしたのではなからうか。それがもらつた側からすれば耳に痛い「ことわりなる事」だったので行

かないと言ったのではないだろうか。

「小男鹿」は萩を求めてやって来る。萩は女性(妻)に見立てられて万葉集の頃から詠まれてきた。萩原にふす牡鹿、つまり、萩(女)に寄ってくるのが当たり前の鹿(男)に(「然も」をかけて)にそんなことを云われたことよという。「云はれたり」は和泉式部の歌のみみられる句である。下句はただそのようなことは「吹く風にまかせておいて」は、会いに来てほしいということであるが、ここも古今集のよみ人しらず「694宮木野のもとあらの小萩つゆをおもみ風をまつごと君をこそまて」が意識されているように。

この歌は「露」が歌に詠み込まれているわけではない。ただ「萩上露」が、男女のやりとりの中の重要なキーワードとして用いられ、歌の背景にもなっているので、とりあげた。

以上の歌は、男女の軽妙なやりとりであり、情趣を詠むという歌ではなく、「露」の役割は実際の「露」ではなく、「露」の語を契機として男女の仲の今の状況を表すことにある。また詳しい詞書を伴うことで、あたかも物語の一場面であるかのような作となっているのも興味深い。

次の二首は、恋人への贈歌である。

八月ばかり、夜一夜風吹きたるつとめて、「いかが」といひたるに

1312 萩風に露吹きむすぶ秋の夜は独り寢覚の床ぞさびしき

世の中はかなき事など、夜一夜言ひ明かして、帰りぬるつとめて

1325 おきてゆく人は露にはあらねども今朝は名残の袖もかわかず

1312 番は萩風が吹いて露を玉と結ぶ、そのような秋の夜の独り寝のわびしさを詠んだものであり、1325 番、は後朝の歌で、別れの悲しみを袖を濡らし続ける露(涙)として詠んでいる。いずれも「涙」を暗示させている。

また、帥宮挽歌群のうちの一首は「無常」を詠む露の歌としてあげられよう。

晝僊ぶ（のうち）

1020 君を思ふ心は露にあらねども日に当てつつも消えかへるかな

宵の思ひ（のうち）

1035 宵ごとに物思ふ人の涙こそ千ちの草葉の露とおくらめ

その他「露」の用例として、「露けし」「露けさ」という表現が六例あり、そのうち「袖」が「露けし」の例が三例ある。この「袖が露けし」歌は古来非常に多く詠まれているものである。和泉式部の次の例は、きせわたしたた菊の露から、自らの袖の露けさを思い、菊（聞く）だけの事と人は見る（聞くとの対比）だろうかと詠む。「人」は菊を「おこせた」人だろうか。菊を贈る方も、歌を贈った方も「折」を意識した風雅な贈答である。

九日、綿覆はせし菊をおこせて、見るに露しげければ

1483 をりからはおとらぬ袖の露けさを菊の上とや人の見る竟

このほかにも「76露けき萩の上」「76露けき花の上」などの例があり（この表現は意外に少ない）自身を萩、花に喩え「露」は涙を暗示している例がある。

人どのかかわりの中で詠まれる「露」の歌は、ここに取り上げなかった歌を含めて三十数首ある。このうち人（ほぼ男性）への贈歌の中では、「露」は「男性」「ひと」を意味し、「命」あるいは「涙」を暗示している。「露」という語が人とのやり取りの中で用いられる時、さまざま場面、状況において使われていることがわかる。特に詞書において複雑な人間関係を示し、その複雑な状況は歌と響き合い、結局は男女間のはかなさを描く。このような例は伝統的な「露」の歌には見られない。ここでは一部を取り上げたのみだが、男女間のはかなさを「露」に喩えて詠む歌が他

にも多くあり、和泉式部独特の表現力で、単純な感慨の歌に終わらず、そこから無常感を読み取ることができるのである。

四 命を詠む

和泉式部の「露」の歌を「無常を詠む」という観点から考える時、一番重要なのは、「露のはかなさ」を「人の命のはかなさ」ととらえて詠む歌である。ここでは「露」にたとえて、身近にある「死」を詠む歌をとりあげ考察する。

いかなる人にかありけむ、わづらふと聞きていひやる

659 さまざまに心置きたる露なればただに草葉の上とやは聞く

和泉式部の歌の中で「いかなる人にか」の詞書を持つ歌はこのほかに三首ある。そのうち508、546番歌は、「だれだったか」くらいの特にたわいのない男性への贈歌とされるが、548番は「いかなる人にか、いひ侍る」の詞書で、

548 いとどしく物を悲しきさだめなき君はわが身のかぎりと思ふに

という歌があり、この歌から詞書のない歌が555番まで続く。この詞書が全体にかかる連作かと思われる程の、片恋の苦しさを主題とする歌が続くのである。この659番も「いかなる人」は「さまざまに心置きたる」人であるので、過去に恋愛の経緯があり、ある程度の縁のある男性についてわざとおぼめかしたものと考えられる。

この「心置く」は心にかける、思いを残すのほか、心の隔てを置くという意味がある(『小学館古語大辞典』)。この歌の解釈は『文庫』は「いろいろの事で隔て心を持ったことのある仲なので。」とし、『全釈』は「相手に対して不快に思ふことがあって、へだて心を持つ意の『心置く』に、『露が置く』をかける」とある。「草葉の上」は『文庫』

は「自分とは無縁の人のことをよそえた。」「全釈」は「自分とは無関係の人の生命の危機としては感じてはゐない。」とある。

この歌の場合、その人との間に恋愛の過程でさまざまな葛藤があつて、現在はつきあいのない相手ではなからうか。それが「心置く」で、しかし隔て心だけでなく愛情も残っており、忘れられない人なので、病氣と聞いて歌を贈った。ここで「露」はその相手でもあり、相手の命とも言えよう。草葉は「露」が置くところで、「草葉の上の露」ははかないもの（命）としてしばしば歌われてきた表現であるが、ここでは「ただに」の語を付すことで、ただ単に、世に言うのと同じはかないものと思うことができようかと、本当は心にかかっているのだと詠んだものと解釈したい。詞書と一体となつて、一つの恋の結末を想像させるような味わいの歌である。

次の三首は「朝顔」と「露」の歌である。

朝顔は『和歌植物表現辞典』^(註12)によるとは平安期に入つて『あさがほ』の花の命の短さと無常観を結びつけてうたう用法』が見られ、「その際、『あさがほ』のはかなさを強調するためには、『露』とともによまれるケースが圧倒的に多い。」とある。また、露と花との関係は「はかない『花』の上に置くさらにはかない『露』という認識が多い一方、『花』が『露』よりもはかないとする逆の発想の詠も見られる」と指摘されている。

亡くなりたりける人の持たりける物の中に、

朝顔を折り枯らしてありけるを見て

1096 朝顔を折りて見んとや思ひけん露よりさきに消えにける身を

1096 番歌は、はかない露よりさきに亡くなつてしまう身とは思わず、朝顔を折って鑑賞しようとしたのだろうかと思ふ。この詞書の亡くなった人はだれであろうか。遺品を見ているので親しい人だったのだろう。亡くなった人の持ち

物を見ること自体命のはかなさを感じる上に、持ち物から出てきたのは「折り枯らした朝顔」である。「朝顔」はすぐにしぼむものの、咲いている一瞬は美しい。「朝顔」を賞美しようと思つて折つた時にはその人は確かに生きていたのにと、その人が生きていた一瞬が枯れてしまった花の向こう、花盛りの幻影と重ねられる。歌の「露」はその「朝顔」に置いた露と見る必要はなく、短命な「朝顔」に置く更にはかない「露」よりも先に「命」が「消えにける」無常を詠んだものである。詞書と重ねること「露より先に」消える人間のはかなさが、印象深く詠まれている。

「暮にかならず」といひたる男、朝顔につけて

1166 今の間の露にかばかりあらそへば暮には見えじ朝顔の花

この歌は「暮れには必ず行く」といつてきた男に、朝顔につけて、今この時置いている「露」と「朝顔」がこのようにはかなく消える事を争っているくらいなので、暮れにはこの朝顔の花はもう見えますまいと贈つたものである。この詞書から見ても男からの音信は朝来たものであり、あるいは前夜約束しながら来なかつたのかもしれない。そこで朝顔を贈り、「露」はもちろんはかなく消えるものであるが、朝顔も夕方にははかなくなつてしまふであろう、自分の命が消えてしまふ前に今すぐ逢いたい、と解釈できる。

ただ、「露」は「男」かもしれぬ。「暮れには必ず行く」という、朝早くの音信は前夜訪れなかつたことの言い訳であろう。いかにも当てにならない約束をする男とこのように争うなかで、私は夕方には死んでしまつていようという意味もあるのではないか。

和泉式部と同時代の歌人の歌では次の例がある。

『好忠集』(好忠集) 毎月集 はじめの秋 七月

191 おきて見んと思ひしほどにかれにけり露よりけなる朝顔の花

1166番はこの歌の直接の享受ではないが、「露」と「朝顔」のいずれがはかないかを問うなかで、両方のはかなさを強調しているところが共通していると見えよう。

世の中はかなき事など言ひて、
槿花のあるを見て

1296 はかなきは我が身なりけりあさがほの朝の露もおきて見てまし

「世の中はかなき事」という詞書を持つ歌はほかに四首（153、215、1325、1373番）見られる。このうち1325番は後朝の歌であるが、他はいずれも「はかなき事」は命にかかわる歌の詞書である。「この世は無常である事」などを言っていて、朝顔があるのを見て、はかないもののためしである朝顔に置く、さらにはかないあしたの露も起きて見ることができようか、実は朝顔の露よりもはかないのはわが身（命）なのである、明日の命はわからない。この歌においても「世の中はかなき事」は命のはかなさにかかわる。「露」は朝顔におくことでいっそう「はかなさ」の強調の表現となる。同時代の歌としては次の歌がある。

『輔親集』

おなじころ、世のはかなき事をいひて人人うたよむに

22人の世はなにかはためしあさがほのつゆけきほどのいのちとおもへば

「露」と「朝顔」を同時に詠む歌は、勅撰集では新古今集が初出で、前掲の好忠の歌である。和泉式部と同時代、あるいはその少し前から、「朝顔」「露」を同時に詠むようになっていく。同時に詠むことで「はかなさ」が強調される。両者とも朝にはその姿を印象づけながら昼にははかなくなってしまう。一時生き生きと存在しながら少しの時間で消えてしまう。「朝顔（花）」には「露」にはない華やかな輝きがあり、「露」にはしぼんだ姿を残す「花」とは違う、跡形も無く消えるはかなさがある。この両者を取り合わせることで「死」と隣あわせだからこそ美しい、その一

瞬をかたどることができる。それは「命」そのものの本質を暗示している。

世の中さわがしうなりて、人の片端より亡くなる頃、人に

1363 知らじかし花の端ごとにおく露のいづれともなきなかに消えなば

世の中が疫病の流行で、人が次々と亡くなっていく頃人に贈った歌で、花びらひとつひとつの先ごとに置く露のように、だれともわからないうちに消えてしまったら（私が死んでしまったら、あなたは知らないままでしょね）と詠む。

「世の中さわがしうなりて」は185番「世の中さわがしき頃、語らふ人の久しう音せぬに」の詞書での歌が和泉式部歌にある。同様に、紫式部の歌にも見られる。

『紫式部集』

世の中の騒がしきころ、朝顔を、同じ所にたてまつるとて

53 消えぬまの身をも知る知る朝顔の露とあらそふ世を嘆くかな

この紫式部の歌と和泉式部の歌との違いは、「朝顔の露とあらそふ」と、「花の端ごとに」という表現の違いである。朝顔の露とあらそうようにというのはそのくらいはかない命と詠むものに対して、花びらひとつひとつに置いていく露が消えてしまうようにという表現は、詞書に「片端より亡くなる」とあるように、もっと大勢の人をイメージさせ、小さな花びらにおく露のごとく人の命などごく軽いものと捉えているところに違いがある。また、「消えぬまの身をも知る知る」（紫式部詠）より「いづれともなきなかに消えなば」（和泉式部詠）は、その他大勢のうちの一として自己を対象化する歌ともいえる。

これらは、長保三年の疫病流行のころ（『日本記略』後篇十一條^(注15)）を二人それぞれに詠んだものであろう。流行

病で片端から人がなくなる状況は、観念ではなく現実のものとしての「死」を身近に感じさせる。「露の命」が、単なる修辞ではない、実感の重みを持つて詠まれている。

露よりも世のはかなきことを人の言ふを聞きて

178 草の上の露にたとへし時だにもこは頼まれじ幻の世か（正集）

露より世のはかなき事があるに 重出歌

1149 草の上の露とたとへぬ時だにもこは頼まれじ幻の世か（続集）

他出 『万代和歌集』^(注) 卷第十八 雑五

3573 草の上の露とたとへぬ時だにもこは頼まれしまぼろしの世か

この歌は重出歌と微妙に助詞が違っており、また諸注の解釈も見解が分かれる。

まず、『全釈』はこの歌の出典は『金剛般若経』「一切有為法、如夢幻泡影、如露、亦如雷。応作如是観」としている。『文庫』も「一切有為法…によるか」と補注にあげている。

『文庫』は178番の脚注「このままの本文では解を得がたい」とし、1149番の「たとへぬ時だにも」を生かして訳は

「草の上においた露とたとえぬ時でも、この世はどうてい頼みにはできまい、幻の世なのか」としている。「頼まれじ」否定形の本文とする。

『全釈』は149番の解はなく、178番「たとへし時」「頼まれじ」として、『し』は過去の『き』とすべきとあり、訳は「草の上の露にたとへし時」は金剛般若経の「一切有為法、如夢幻泡影、如露」と仏が説いた時とし、その時でさえ「頼むに頼み得ない幻の如き世」であった。「まして現世の幸福など力になりましようか」と解釈しており、本文を「頼まれし」としながら、実際は「頼まれじ（否定）」で解を示しており、また「仏がこの世のはかなさを説

いた時でさえ頼み得ない世」という解では「さえ」のつながりが不明である。

『万代和歌集』は続集¹¹⁴⁹1149番と底本の表記は同じだが、「頼まれし」と本文を立て、訳は「草の上の露に譬えない時でも、この世は頼りにできた幻の世なのか、もともと頼りになぞできなかったではないか。」としている。

先行研究を踏まえて、さらに納得できる解釈ができるわけではないのであるが、一応本文を選択判断して考察したい。

まず、¹²⁹⁶1296番でも触れたように、和泉式部の「世の中はかなき事」の詞書の歌（¹⁵³153、²¹⁵215、¹²⁹⁶1296、¹³⁷³1373番）は「命」にかかわる歌である。たとえば次のような歌である。

常よりも、世の中はかなう見えし頃、九月九日

¹³⁷³1373聞きときく人は亡くなる世の中に今日も我が身は過ぎんとやする

正集¹⁷⁸178番の詞書は「露よりも世のはかなきことを人の言ふを聞きて」続集¹¹⁴⁹1149番は「露よりも世のはかなきことをあたるに」とあり少しニュアンスが違う。¹⁷⁸178番「露よりも世の中はあつげなくむなしことと人が言うのを聞いて」、また¹¹⁴⁹1149番は「露よりも世の中にはかない事があるを」となっているので、一般的に世の中のはかなさというのだけではなく、おそらく人が亡くなるような状況が続いて、正集の場合は「人が言っていた」のを聞いて、続集の場合はそういう状況があるのを詠んだということになろう。正集は贈歌か、続集は独詠のかたちとなっている。

上句は「草の上の露」は置くときすぐ消えてしまうはかないもので人の命に喩えられる。¹⁷⁸178番では「命」をはかない「草の上の露」とたどえた時ですらも、となり、また¹¹⁴⁹1149番は逆で、「命」を「草の上の露」にたどえない時でさえも、となる。しかし、「命」は「草の上の露」に既に喩えられているものであるから、「だにも」と続けるためには、上句は否定の本文の方が良い。詞書からの続きとしても¹¹⁴⁹1149番の「たとへぬ」の方の本文を取りたい。

下句であるが、続集「我不愛身命」歌群の中に次の歌がある。

1401 幻にたとへば世はた頼まれぬなけれどあればあれどなければ

この歌の内容を、『文庫』訳で見ると「この世を幻にたとえれば、一方また頼みとすることができ、なぜといえ
ば、幻ははかないように見えてあり、あるように見えてないから。」とある。この世はすべて幻であると詠む。

この1401番の歌をヒントに考察すると、1149番は、「露とたとへぬ」時でさえこの世は幻であつたのだ。「こは」は詞書の「はかなき事ある世の中」で、「やはり頼みにできない幻の世だったのか」と解釈できるのではないか。上句の「時だにも」のあと、「ではどうであつたのか」という言葉がなく、そこに傍線をつけた意があると考へた。下句との間に一呼吸おいているのである。難解であるが、この世で救い得ない無常を「露」をたとえに詠んでいることは理解できよう。

五 まとめ

和泉式部の「露」を詠んだ歌は三節の冒頭で示したように約七十首ある。ここに挙げたのはその一部である。ここでは取り上げた以外の歌も含め和泉式部歌の特質をまとめる。

第三節にあげた伝統的な詠い方の中には他に、「露が木々を染める」発想の歌、「檀色づきたり」として「830きしよ
りもまだき檀の色づくは秋に入る日に露や置くらん」があり、また七夕に詠まれた「1280風の音に秋来にけりとおどろ
きて見れば草葉の露も置きけり」もある。前述の初期百首61番にも見られるごとく、これらは古今集の影響をうけて
いる。ただ、新編国歌大観によれば実は「檀」と「露」を取り合わせた歌は少なく、平安時代では忠見と和泉式部く
らしいか見出せない。そこに感性を働かせ、「真弓」と「射る」の掛詞をひそませる巧みさは、単なる古今集の影響

だけの歌ではないことを気づかせられる。

思いを詠む歌は例にあげた二首もそうだが、根底に流れるのは孤独感であり、それは結局は人との関わりを詠むことにつながる。独り居は現在人との関係が途切れているか、不透明な状況にあり、「露」は人との関係のはかなさや、涙の契機となる。例えば「九月晦方に、物思ふ頃」として「¹²⁹⁷白露とおきあつつのみあるべきをいづち見捨てて秋の行くらむ」や、「¹²²⁴こなつ ほととぎす あやめぐさ これを人のよませし」という題詠で「¹²²⁴ふすこなつは塵も積もらぬ物にざりける」などは、人の不在を感じさせる。また「⁹⁷²わが袖は蜘蛛の網がきにあらねどもうちはへて露の宿りとぞ思う」の「露」は「涙」を表す。このように独詠においても人との関係の不如意を暗示させている。

人との関わりのなかで詠む歌は、ほぼ贈答歌である。他人からの贈歌は省略されて詞書に含まれるものが多い。独詠と見られる歌は「例の物へいにし人を思ひ出でて」として「⁷⁰⁸いかならん背子が旅寝の草枕いとかく露はおきもせじ」や、親との関わりで詠んだ独詠（¹³⁷²番未掲）もある。また、人に贈った歌の中には、扇につけて贈った歌が三首（⁶⁴⁵番、⁹²⁰番、¹²⁵⁴番以上未掲）見られる。

男女の贈答歌の本質として男性からの贈歌に対しては女性にはぐらかして返すのが普通であるから、「露」の贈答歌でも三節で考察した二首にみる如く必ずしも情趣深いやりとりではなく、丁々発止の掛け合いの歌も生まれる。たとえば²⁶³番は詞書が「忍びて語らふ人の、煩ひて、『今宵はえ過ぐすまじ』といへりければ、またのつとめて」とあり、「²⁶³おぼつかな夜の間の程も白露のおきあやすらん死にやすらん」と詠んでいる。随分とひどいことを詠んでいる様だが、男の方の大げさな物言いに対して、それほどではないことを見越して、このような歌を贈ったのだらう。ここでは「露」は「知らず」と「起き」にかける言葉としての役割しかないが、男の「命」の意味とも取れよ

う。「露」の無常を詠む歌も和泉式部の本質であるが、このような歌を詠むのも、和泉式部の特質なのである。

第四節で検討した「命」を詠む歌には、題詠、独詠、贈答、連作的な歌群も含まれる。これは、和泉式部はどのような詠歌状況においても、はかない「露」を「命」と詠んでいるということであろう。和泉式部が自らの命を詠んだ歌に「にはかにいたく煩ふほどに、来合ひて見たる男のもとより、いとほしかりし事」という詞書で、¹²⁸⁶「ことならばあはれと見まし目の前に涙の露と消えましものを」という歌がある。この歌は自ら病を得た時の素直な心情で、男の優しさからその眼前で死にたいという、実感としての「命」が詠まれている歌である。「露」を「命」と捉えることは観念であるが、この歌のように、あるいは前掲の¹³⁶³番に見るごとく、死が現実のものとなった時、「露」が我身に置き換えられ、はかなく消え、そして消滅に抗うことができないことに気づく無常を詠んでいるのである。

「露」はそれ自体香りがするとか、色が美しいとかの主張を持たない、無色透明な存在である。だが、「露」に光があたって光る時、または植物などに置いた時、人はそれに何らかの感興を催し歌を詠む。「露」は「何か」とともに詠む歌材なのである。「何か」はそれが事物であったり、情景であったり、あるいは人であり、自分の内面で、思想であったりする。それが和泉式部の歌の場合多様にあるということである。「多様」にあるというのは、詠者である和泉式部が多様に受け止めているからである。そして、それを和泉式部が巧まずして巧みに表現する力量は計りがた。考察の中でも指摘したが、歌を単純になぞっただけではわからない深い意味がある。そしてこれらの歌に共通して流れている、和泉式部の観念のようなものがあるということである。

和泉式部の有名な歌に、後拾遺集卷第十四恋四の次の歌がある。

つゆばかりあひ見そめたる男のもとにつかはしける

831 白露も夢もこの世もまぼろしもたとへていへばひさしかりけり

この歌でははかないものの代表のうちに「露」が挙げられ、その「露」でさえも、男女（私たち）の仲にたとえれば久しいものであったのだと詠んでいる。露の置くほんのひとときすら長く感じられるほどに、恋ははかないというわけであるが、この歌はそれを嘆くというより、既に178番でもあげた「無常」の諦念が根底にあつての詠歌であると考えられる。列挙された「はかないもの」には、やはり「金剛般若経」が根本にあるうか。

そして全体を通して見れば、はかない「露」及び「露」が影響を与えているものを、すべてをじっと見つめている和泉式部の目が感じられよう。そこには何かしらの観念、諦念、または思想のようなものが流れているのであり、それが和泉式部が持っている無常観であると考ええる。はかない「露」はそこに作用して「露」の歌を生み出したのである。

和泉式部の「露」の「無常を詠む」歌には重要な「観身岸額離根草」歌群や、「我不愛身命」歌群の露の歌等まだ論ずべき歌が他にもある。紙数の関係でここに取り上げられなかった歌に関しては稿を改めて論じたい。

注

- 注1 『歌ことは歌枕大辞典』久保田淳、馬場あき子著（角川書店 一九九九）
注2 『和泉式部百首全釈』久保木寿子著（風間書房 二〇〇四）
注3 『曾禰好忠集』松本真奈美・高橋由記・竹鼻績著（和歌文学大系54 中古歌仙集一 明治書院 二〇〇四）
注4 『和歌植物表現辞典』（平田喜信・身崎壽著 東京堂書店 一九九八）
注5 『和泉式部集全釈』正集篇 佐伯梅友・村上治・小松登美著（笠間書院 二〇一二）
続集篇（笠間書院 1977）
注6 『重之集』新藤協三・西山秀人・吉野瑞恵・徳原茂実著（和歌文学大系52 三十六歌仙集一 明治書院 二〇一二）
注7 注3に同じ

- 注8 『元輔集』（書誌は注6に同じ）
- 注9 『枕草子』松尾聰・永井和子校注訳（新編日本古典文学大系18 小学館 一九九七）
- 注10 『和泉式部日記』和泉式部集』野村精一校注（新潮日本古典集成 一九八一）
- 注11 『和泉式部集小野小町集』窪田空穂校注（日本古典全書 朝日新聞社 一九五八）
- 注12 注4に同じ
- 注13 注3に同じ
- 注14 『紫式部日記』紫式部集』山本利達校注（新潮日本古典集成 新潮社 一九八〇）
- 注15 『国史大系 日本記略 第三（後篇）』吉川弘文館 一九八八）
- 注16 『万代和歌集 下』（和歌文学大系14 安田徳子著 明治書院 二〇〇〇）
- 注17 『般若心経 金剛般若経』中村元・紀野一義訳註（岩波書店 一九六〇）

（東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科在籍）

キーワード

和泉式部、和泉式部集、露、無常